2024 年 1 月 22 日発行

風車 Vol 12

「仁木町の風力発電を考える会」
宮下　洋子

中央省庁に「上申書」

仁木町民の皆さま、寒中お見舞い申し上げます。
皆々さまに於かれましては、健やかな年越しが叶いましたでしょうか。

「仁木町の風力発電を考える会」では、心新たに活動を始めております。

今年は、住民の方々に、「考える会」に対する先入観や、色眼鏡を外して頂けますように、仁木の未来を共に考え、行動する信頼関係を築いていかれたら嬉しいな、と願っております。

どうぞ、本年もよろしくお願い申し上げます。

★新年の仕事始め

⑴ **中央の関連省庁に対し、**下記の**「上申書」**を提出致しました。

⑵ **佐藤仁木町長に対し、「要望書」**を提出致します。（1 月 25 日）
「要望書」の内容と、1 月 25 日の会談の内容につきましては後日、新聞折り込みチラシにて公表する予定です。

⑶ **「風力発電に反対する北後志連絡会」**の発会式（1 月 30 日）

上　申　書

2024年1月17日

経済産業省　再生可能エネルギー推進室長　伊藤　隆庸　様
環境省　地域脱炭素推進審議官　植田　明浩　様
林野庁　森林整備部長　長崎屋圭太　様

仁木町の風力発電を考える会
宮下　周平
宮下　洋子
〒0048-2406　北海道余市郡仁木町西町 11-121
TEL　0135-48-5516

寒中お見舞い申し上げます。
本年も、よろしくご指導の程、お願い申し上げます。

さて、昨年 12 月 6 日、**「全国再エネ問題連絡会」**の共同代表に随行し、㈱関西電力が計画した北海道北後志地域の**「（仮称）古平・余市ウィンドファーム事業」**と**「仁木町南部計画」**について報告させて頂きました。お忙しい中、お時間を取って頂きまして心より感謝申し上げます。

その後、**12 月 16 日**に、**「（仮称）古平・余市ウィンドファーム事業」**について（株）関西電力による**「方法書」段階での説明会**がありました。
しかし、その余りにも住民無視の態度と進行に対して、普段物静かな住民の方々が騒然として物々しい説明会となりました。

それと言うのも、1 時間の関電側の説明が終わった後、質疑応答は、事前に質問用紙に書いて提出させ、それをスライドで映しながら、1 時間半、一方的に関電が説き続けて終わったからでした。
しかも、5，6 人の男性スタッフが、120 人ほどの参加者の周りを取り囲んで立っており、ステージ前に進んで抗議する人、マイクを取って発言しようとする人を席に連れ戻し、大声で抗議する人たちも制止されました。

司会者は、「後で、個人的に質問は受けますから、とにかく静かに」と、何度もアナウンスしましたが、ついに時間一杯まで、何も聞こえなかったかのように、一方的に説明して終わりました。

司会者が、「時間になったのでこれで閉会します。質問のある方は、残って質問を受け付けます」と言いつつも、大勢のスタッフがどんどん机と椅子を片付けて追い出されてしまいました。

スライドも、関電にとって都合の悪い質問は、全部カットされていました。町会議員の質問も取り上げられなかったようで、「関電の自作自演だ！」と怒っておられました。

質疑応答の際には、「個人情報・プライバシー保護のため」という理由で、マスコミ関係者の入室は全てシャットアウトされましたが、スライドに映された質問には、個人名は明記されていませんでした。

数日後、「全国再エネ問題連絡会」の zoom 会議があり、この件を報告すると、「全国各地での説明会でも、それはあり得ない」との事で、役員一同、憤っておられました。また、マスコミ関係者も、この件に付いて、批判的に取り上げております。その記事を添付いたします。

そこで、12 月 6 日に訪問させて頂いた経産省、環境省、林野庁の方々が、真摯に当地の現状報告を詳らかに傾聴して下さいましたので、以上の件についてお尋ねさせて頂くことに致しました。

「環境アセスメント」に義務付けられた「住民説明会」は、このような住民無視、言論封じの姿勢で、住民は何一つ納得していない状況でも認可され、次の段階に進むことが出来るのでしょうか？

私共は、これまで、関電側と「説明会開催」の約束を文書で取り交わしたにも拘わらず、何度も反故にされ、一事が万事、信頼出来なくなっております。

そして、この度の「方法書」作成者が、関電の子会社で、犯罪歴の有る「㈱KANSO テクノス」と聞いて、ますます信用が出来なくなりました。

北海道新聞

2023年（令和5年）12月17日（日曜日）

関電の風力計画 説明に不満の声

【仁木】関西電力は16日、計画中の風力発電事業「（仮称）古平・余市ウインドファーム」に関する初の住民説明会を町民センターで開いた。約120人が参加。関電側は計画を縮小し、風車建設予定地から仁木町エリアを外すことを表明したが、参加者からは「地域が納得できるよう真摯な態度を示してほしい」との声が続出した。

関電の担当者は従来計画を変更し、古平、余市両町にまたがる区域で最大出力7万5600㌔の発電所を開発すると説明。仁木、共和両町での風車建設は取りやめ、設置する風力発電機を64基から18基に減らすと述べた。一方で、仁木町南部を含むエリアで別の計画を検討し、再提出するとした。

質疑応答は報道陣に非公開で行われた。参加者などによると、「環境への影響は」「別の計画はいつ提出するのか」などの質問が出たが、具体的回答は示されず、70代女性は「関電が都合のいい質問に答えただけ。全く納得できない」と不満をあらわにした。

説明会は事業計画や環境影響評価方法書の内容を説明するために実施。この日は古平町でも開かれ、17日は余市町で開催される。

（伊藤圭三）

関電が主催し仁木町で開かれた風力発電の説明会

以上、㈱関西電力と仁木町住民とのコンセンサスは全く得られていない現状を、ご報告申し上げるとともに、関係省庁が、「方法書」から先に進むことを許可されませんように、また、**このような住民無視の説明会が全国的にも行われませんように、省庁の関与をお願い申し上げたいと思います。**

また、当会発行の最新版「風の祈り 17 章」と、仁木佐藤町長への「要望書」、「風車 Vol.１１」を添付致しましたので、ご参読頂ければ幸いに存じます。ありがとうございました。

なお、これらの文章と、関係省庁への「上申書」は、仁木町全体に、新聞折り込みチラシとして配信させて頂きたいと思います。

風力発電　地元の逆風やまず

関電　仁木説明会

「ゼロベース検討　信用できぬ」

後志地方の古平町などで風力発電所の建設を計画している関西電力は16日、住民を対象に説明会を開いた。地元などに反対の声が根強く、関電は計画を大幅に縮小する方針だ。計画地から外れた仁木町での説明会には多数の住民が詰めかけたが、関電側の説明に「信用できない」などと厳しい声が相次いだ。

後志地方で風力発電所を計画する関西電力が開いた地元住民への説明会＝いずれも16日、仁木町

仁木町の町民センターで午前10時から始まった説明会には約120人の町民が参加した。雪の降る中、事前に用意した100席を上回る住民たちが訪れ、風力発電所計画に対する関心の高さをうかがわせた。

関電側は計画の概要を説明し、「地球温暖化は異常気象をもたらす。二酸化炭素（CO_2）を減らすには再生可能エネルギーを増やす必要がある」と風力発電の意義を強調。その後、住民との質疑応答に移ったが、関電側は「住民のプライバシーに配慮する」と報道陣には非公開とした。

関電は昨年5月、古平と仁木、余市、共和の4町にまたがる約8500㌶の事業想定区域に最大64基、最大出力約26万8800㌔ワットの風力発電所をつくる計画を発表した。だが、想定区域内には保安林や手つかずの自然が残る山林が含まれ、日本自然保護協会などが事業の中止や抜本的な見直しを求めていた。

環境省も「国内で例が少ない大規模な事業」（環境相の意見書）として事業区域を絞り込み、地元の理解を得るように求めていた。慎重な対応を求める意見が強まる中、関電は11月21日、4町に広がっていた計画地を古平、余市の2町の約1400㌶に絞り、最大出力約7万5600㌔ワット、風車の数も最大18基と当初の3分の1ほどに縮小する、と発表した。

JR仁木駅前には風力発電所に反対するポスターが掲げられていた

ただ、関電は今回計画地から外れた仁木町の銀山地区で、別の風力発電事業ができないか可能性を探る方針だ。

約3時間に及んだ16日の説明会でもこの点に質問が集まった。「銀山エリアにつくらないでほしい」という声が住民から出たが、関電は「ゼロベースで検討する」と答えるにとどまったという。住民有志でつくる「仁木町の風力発電を考える会」の穂積豊仁代表は「関電はまだあきらめていないのでは。表面的な回答ばかりで信用できない」と関電の姿勢を批判した。

脱炭素社会に向け、関電は2050年に事業活動に伴うCO_2の排出ゼロをめざし、40年までに500万㌔ワットの再生可能エネルギーを新たに開発する目標を掲げている。

そのため関電は営業エリアの関西圏以外でも再エネの発電所をつくる計画を進めており、道内では昨年5月、後志や夕張市などで計4カ所の風力発電の開発計画を発表。そのうち伊達市や千歳市などで検討していた事業は、区域内にある国立公園の景観を損ねるとの指摘を受けて最終的には断念に追い込まれている。

後志地方の計画についての住民説明会は16日夕方に古平町で行われ、17日には余市町でも開かれる。

（編集委員・堀篭俊材）

関電風力　質疑は「書面」

仁木、古平、余市　住民説明会に200人超

【仁木、古平、余市】関西電力が計画中の風力発電事業「（仮称）古平・余市ウインドファーム」の住民説明会が16、17の両日、仁木、古平、余市の3町で開かれた。計200人以上が出席し、関心の高さがうかがえた。一方、質疑応答は対話ではなく、1人1問ずつ書面を提出する形を取り、議論は深まらなかった。

参加者との質疑応答は報道陣に非公開。参加者によると対話形式ではなく、1人1問ずつ紙に書いて提出した問いに答えたため、関電側の一方的な説明が目立った。また、再質問は受けず「疑問ばかりが募った」（ある出席者）という。

仁木町では、当初計画していた仁木、共和両町での風車建設は取りやめ、仁木町南部を含むエリアで別の計画を検討し、再提出すると正式表明。ただ、提出時期は「ゼロベースで検討している」と述べるにとどまり、仁木町の風力発電を考える会の穂積豊仁代表は「町民が知りたいことは何も話していない」と憤った。

札幌市から余市町に移住し、家族4人で農業を営む女性(43)は超低周波音で健康被害を受け、農業を辞めざるを得なくなった場合の補償について質問したが、「答えてもらえなかった」と残念がった。

関電再生可能エネルギー事業本部の市橋公平部長は、「余市会場だけでも130件以上の質問をいただいた。数が多く、対話形式では答えるのが難しかったと思う。寄せられた意見や疑問は今後の環境影響評価に反映させたい」と語った。

説明会は関電が事業計画や環境影響評価方法書の内容を説明するために開催。説明では、古平、余市両町にまたがる区域で最大出力7万5600㌔の発電所を開発するとした上で、環境への影響や風車による騒音、超低周波音が与える被害の有無、土砂災害などに配慮した工事方法などについて解説した。

（伊藤圭三）

関西電力が主催し、仁木町で開かれた風力発電事業の説明会＝16日

仁木町民センターで開かれた関西電力の説明会（12月16日）

仁木町の佐藤町長が関電の風力発電計画に反対表明

首長の背中を押した住民の反対運動と風発への不信感

関西電力が仁木町の銀山地区を含む同町南部エリアで別の風力発電事業を検討している問題をめぐり、これまで中立の立場とされていた同町の佐藤聖一郎町長が12月21日、仁木町議会の一般質問で「好ましくない」と事実上の反対表明を出した。先立つ16日に行なわれた関電主催の説明会では、住民から銀山地区での事業中止を求める声が上がったが、具体的な回答はなく大荒れの展開に。佐藤町長が反対の意向を示した背景には、「仁木町の風力発電を考える会」（穂積豊仁代表）が1年半にわたり続けてきた反対運動と地元住人の風力発電への根深い不信がある。

（武智敦子）

関電を断念に追い込んだ住民

関西電力は2022年5月、後志管内の古平、仁木、余市、共和の4町にまたがる8546ヘクタールの山間地に最大64基、最大出力26万8800キロワットの風力発電施設を建設する計画を明らかにしていた。

しかし23年11月21日には、予定地の一部に自然度の高い植生が確認されたことを理由に、仁木町と共和町を外し古平と余市に限定し、最大出力約7万5600キロワット、最大18基に縮小すると発表した。ただ、同町の銀山地区を含む南部エリアについては、別の風力発電事業の候補地として可能性を探る方針を示した。

この決定を受け、12月16日午前10時から仁木町民センターで開かれた関電主催の説明会には、住民ら約120人が参集。関電は事業縮小に至った経緯を説明した上で、銀山地

区については別の風力発電事業を検討するとした。続く質疑応答は「住民のプライバシーへの配慮」との名目で報道機関には非公開だった。

この時の様子を複数の参加者に聞くと、まず関電は低周波についての一般的な説明を約20分間続けたという。会場からは「時間稼ぎをするな」「質問が先だろう」と抗議の声が上がったが、関電はそれらを無視して再エネの必要性を強調。質問事項については、前もって住民が用紙に書いた質問をスクリーンに投影する形で行なったが、記載した住人の名前はなかった。

「なぜ北海道で風力発電事業をするのか」という質問については、「全国で再エネを検討しているが、南部エリア(仁木町銀山地区)についてはゼロベースとなっている」。土砂対策に対しては「安全対策を行なうので、土砂崩れを引き起こすとは考えていない」と応じた。さらに「銀山地区での中止を明言せよ」という求めには「今後、検討するという段階であり、何も決まったことはない」と具体的な回答を避けた。

70代の男性は、「関電の応答はスクリーンに映し出された質問だけに終始し、具体的な内容は何ひとつ出てこなかった。会場での直接質問は一切受け付けず、説明会が終わった後に1時間ぐらい意見を聞くと言っていたが、終了後は会場のイスなどの片付けを始めたので参加者は帰ってしまった。全く住民をバカにしている」と話す。他の参加者からは「自分の質問は無視された。回答しやすい質問だけを選んだのではないか」と憤る声も聞かれた。関電による説明会は同日16日夕に古平町で、翌17日には余市町でも開かれた。

「仁木町の風力発電を考える会」が主催した銀山地区での集会(11月26日)

後日、記者が関電に確認したところ、銀山地区での事業については「今後、環境アセスメントなどの手続きを進めていくかどうかを含めて具体的に決まったものがなく未定の状態」(広報担当)とコメント。一部の住民の質問が取り上げられなかった件は、「記載いただいた質問をパソコンに打ち込んでスクリーンに投影し、時間が許す限り質問に応じました。疑問の残る人については、終了後に個別に説明する旨をアナウンスし、ご意見に対して回答しました。回答する質問を意図的に選んだ事実はありません」(同)と釈明した。

＊

説明会後の12月21日に開かれた仁木町議会。山内健生町議の一般質問で、関電が事業計画から仁木町を外したことへの見解を問われた佐藤町長は、「環境保全の見地から適切に配慮した」と評価した上で、銀山地区を含む南部エリアを別事業として検討していくとしたことには「地域内には特段の配慮すべき住人(※地域内には障害者施設や保育所、学校などがある)がいることを考えると同エリアでの事業は好ましいものとは考えていない。事業の実施に向けて具体的な検討が行なわれる場合は、このことを事業者に伝えていきたい」と明言した。

さらに、佐藤町長は銀山地区の保育所の保護者や住人らから反対を求める要請があったことを明かし、「これまでは具体的な計画が示されていない段階で賛否を言うことはできなかった。銀山地区においては地域の人々が不安を抱いている以上は賛成することはできないと考えている」とした。「中立」の立場とされてきた佐藤町長が初めて態度を明らかにした背景には、住民団体「仁木町の風力発電を考える会」の1年半に及ぶ反対運動がある。22年8月から毎月学習会を続け、署名活動にも取り組むなど、同会の活動は多くの住民に影響を与えてきた。

同会と「余市町の風力発電を考える会」は23年12月6日、関電が余市と古平で計画している風力発電事業を許可しないよう求める要望書と1万7916筆の署名を農林水産省、環境省、経済産業書に提出するなど、その活動は八面六臂だ。

いずれにしても佐藤町長が反対表明を出したことで、関電が後志で計画している風力発電事業は新たな局面を迎えそうだ。同会の中心メンバーで国に要望書を提出した宮下周平さんと洋子さん夫妻は「仁木町だけでなく余市町などの他団体と連携しながら後志管内の風車計画を中止に追い込んでいきたい」と意欲を新たにしている。